

## 文学紀行の楽しみ



「ドン・キホーテ」

私は定年5年目から昔読んだ文学作品の舞台を訪ねる旅を始めました。少々カッコよく言えば「世界文学紀行」といったところですが、充実感があり皆さんにもお勧めしたくここでその背景や方途についてご紹介させていただき次第です。

たまたま私は現役時代には新聞社の特派員として10年間ほどパナマに駐在、中南米とヨーロッパの一部の国々を訪れる機会に恵まれました。原稿の執筆にさんざん苦勞し、写真も本社から叱られながら撮ってきたそんな経験と、なんとか二カ国語ができることを最大限に生かしていく一つの道がこの文学紀行「風と共に去りぬ」だと思ったのです。



現在まで取り上げてきたのは外国文学が主流ですが、これからは日本文学、特に温泉が舞台となっている作品にも取り組んでいきたいと思っています。もし、この随想をお読みになって言葉の面でご心配の方は、この「日本文学紀行」も人生を大きく充実させてくれるであろうことを訴えたいところです。



「赤毛のアン」

紀行にはいろんな形の取り組み方があると思いますが、ご参考までに私流のやり方を紹介しますと：

- I. まず取り組みたい作品の再読から始まります。若い時に読んだ本も人生の年輪を経た今、読み直してみると新しい発見や異なった感想が湧いてくることもあります。思い切って未読の「読みたい」作品に取り組むこともよいでしょう。ページを繰りながらのワクワク、ドキドキは、身体のみならず心も枯れかけているシニアに瑞々しさをもたらしてくれます。
- II. ついでに他人の書いた紀行や評論等があれば参考にします。今はネットを探してみると、あらゆる情報がゲットできます。紀行文を書くための基本的なデータはほぼネットから得ることができるでしょう。
- III. 事前の準備で膨らんだイメージを胸に作品の舞台を訪れ、あれこれと想像をめぐらせてみます。なかには永遠の純愛小説「ロミオとジュリエット」の舞台のイタリアのペローナのように、作品が有名になってから小説の内容に合わせて後から舞台が作られているケースもあります。そんな経過を推量するのも楽しいものです。
- IV. 観察した舞台の様子と自分らしい分析や感想をなるべくその場で記録してくる。私はその場が無理ならばホテルに戻る電車の中とかホテルで概要を書き留めてしまうようにしています。帰国してからゆっくりまとめるのもよいですが、どうしても臨場感に欠けてくるのです。次いで帰国したら他人の書いた紀行や評論も参考に、場合によっ

ては著作権に留意しながら必要な部分を引用させてもらったりすると自分の書いたものに広がりや奥行きが出てきます。

- V. せっかくなのでいろんな角度から写真も撮ってくる。30年近く前の自分の特派員時代と違って、現在はデジカメを初め、カメラの機能が飛躍的に進歩しています。素人でもプロに準ずるような素敵な写真撮影も可能ですから。



ライン川紀行

- VI. 訪れた先では思わぬ出会いやエピソードに遭遇することもあります。例えば今年の6月、「戦争と平和」「罪と罰」の取材で訪れたロシアでは、行く先々で初々しい新婚のカップルに遭遇し、お祝いの声をかけながら写真も撮ってきました。本来の取材予定外の写真と短いレポートは追って「June Brides in Russia」とのタイトルで女性誌にも掲載されたのです。

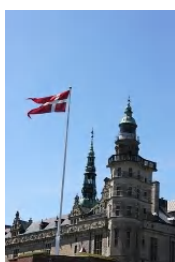


- VII. 取材旅にはお金がかかります。原稿料などが入ることがあれば越したことはありません



ロシアの花嫁

トルストイが、なかなか難しいのが現実です。でも一つの作品に取り組んでまとめる作業は、単なる観光旅行よりもはるか創造的な楽しみや充足感で心を満たしてくれます。その満足感が自分への原稿料と思ってもよいでしょう。幸いに私の場合、ホームページを開いているのでそこに掲載し、関心のある方にご覧いただいているところです。何よりも、自分が楽しんできたのですから、それだけでも“モトをとった”くらいに考えていくと気が楽になりますね。



それでも一番の課題はやはりいかに旅費を安く抑えるかでしょう。そのためには作品が決まるとできるだけ早くフライトの予約をします。早ければ早いほど安い値段で手に入る。これを私はネット上か近くの旅行社（H.I.S.）で手配をしてきました。



次にホテルの予約。これもネットか旅行社を利用しますが私の場合、最高でも三つ星のホテル。ときどき訪れた現地で豪華「ハムレット」の城な五つ星ホテルに宿泊しているシニアやOL、女学生に会うこともあり、少しばかりのやっかみや悲哀みたいなものを感じることがありますが、それはそれで割り切って！

「なんたってこちらは年金生活者。それが何回も海外に出てくることができるだけ幸せじゃないか。単なる観光以上の楽しみを創りだしているんだし・・・」なんて自分に言い聞かせているわけです。

参考までにこれまでの8回15作品の取材費を推計してみると、1週間から10日間の旅で1回30万円前後かな、といった感じです。内訳はヨーロッパでもアメリカ大陸でも格安便のエコノミー席で往復10万円前後、ただしこれに「燃油サーチャージ」が4~5万円追

加されてしまうのが残念です。次いでホテル代が1泊1万円前後、それに食事代や現地での移動費や雑費、保険等を合算するとこの金額になるのですね。(私は「ずいぶん安くあげている」と思っていますが・・・)



幸いに夫婦二人つつましく生活していけばなんとか年金でやっていかれるので、これらの取材費を蓄えるためにいろんな仕事をしています。高齢者のための仕事の斡旋機関・シルバー人材センター関係の仕事で、これまでに駐輪場の自転車管理、市の施設の受付作業、市報の配布等をしてきました。また同センターの理事の任も受け、会報の編集などにも取り組んでいます。



「レ・ミゼラブル」

「三銃士」 そのほか、元の職場でこれまでの海外体験と語学を生かした仕事を週に2回ほど、それにいろんな形のボランティア活動などに参加しています。

定年後の私をこのように突き動かしている原点は、HPのプロフィール欄でも紹介している次の言葉です。

**「理想と正義に向かって突進するオレのことを皆はおかしいと言う。でも、やりたいことがあるのに、世間の風評、体面なんかを気にして現実に妥協、やろうとしない彼らこそおかしいんじゃないのかね……」**



——ドン・キホーテのつぶやきから——

先月の19日には松本幸四郎が主演するミュージカル公演「ラ・マンチャの男」が1200回を達成したことが話題になっていました。“見果てぬ夢”に向かってどこまでも進むドン・キホーテは、シニアの生き方に一石を投げているように思えてなりません。

この“気まま”な随想が、皆様が文学紀行を始められるか、または何か新しいことを始められるきっかけとなれば幸いです。



「どちらが高い？」



「ベニス商人」の舞台



パナマのアミーゴたちと